ミステリー小説としての「エミリーへの薔薇」

大　野　　真

1. 序—フォークナーとミステリー

ウィリアム・フォークナーとミステリー小説（推理小説あるいは探偵小説。「ミステリ」と呼ぶことも多い）という組み合わせは、一見したところ奇妙なものに思えるかもしれない。ノーベル文学賞を受賞し、難解な作品を書くことで知られるフォークナーと、娯楽としての大衆小説の代表的なジャンルであるミステリーとはかけ離れたものに感じられるだろう。

しかし、フォークナーとミステリーは深い関係があるのだ[注1]。

まず、フォークナーは、明らかにミステリーを意識した小説をいくつか書いている。例えば、『サンクチュアリ』や『駒さばき』、『墓地への侵入者』といった作品である。レイプや殺人、リンチといった暴力的事件を描いて物議をかもした『サンクチュアリ』は、ダシール・ハメットなどのハードボイルド探偵小説との類似性が指摘されている（Bleikasten 237; Fiedler 85-86; Watson 54）。『駒さばき』や『墓地への侵入者』では、弁護士・検事であるギャヴィン・スティーヴンズが探偵役として活躍し、共同体内の様々な事件を解決するために努力する。『駒さばき』の中に収められた短編「調合の誤り」は、『エラリー・クィーンズ・ミステリー・マガジン』の1946年6月号のコンテストで2位を受賞しており、1人2役や「犯人が被害者に変装する」などの、推理小説の代表的なトリックを使用している。

以上挙げた狭い意味での推理小説的作品以外にも、フォークナーは様々な形でミステリー的要素を作品中に活用している。例えば、フォークナーの最高傑作とも言われる『アブサロム、アブサロム！』は、トマス・サトペンという男やその家族にまつわる謎を解きほぐしていく中でアメリカ南部の歴史の深層に迫ろうとした作品であり、クリアンス・ブルックスが指摘したように、広い意味での一種の推理小説としてとらえることもできるのである（Brooks 311）。

一方、推理小説界の側からも、フォークナーの作品を推理小説の歴史の中で位置づけようとする試みがある。例えば、ジュリアン・シモンズの推理小説史 *Bloody Murder* は、フォークナーの『サンクチュアリ』や『墓地への侵入者』を、ハメットの作品と比較しつつ、それと類縁したものとして論じている（Symons 139）。シモンズはハメットのハードボイルド探偵小説を従来の謎解き推理小説に対する一種の「反逆」としてとらえており、フォークナーの作品はこうした新傾向のミステリーと共通点があるようだ。

また、最近日本でも翻訳が復刊されたヘレン・マクロイの推理小説『幽霊の2/3』（1956）でも、フォークナーに対する言及があって興味深い（93, 174）。この作品はミステリーの手法を用いて1950年代の出版界の内幕を描いたものだが、主人公の人気作家エイモス・コットルについて、ある文芸批評家は以下のようにコメントする。「偉大でも普遍的でもないという点で、エイモスは今の時代の典型的な大衆作家です。フォークナーのロウブラウ版、いや、少しお利口なミッキー・スピレインの方が近いな」（174）。フォークナーだと難解すぎ、スピレイン（過激な血と暴力の描写で当時爆発的に売れたミステリー作家）だと低俗すぎる、その中間ぐらいがちょうどいい、という意味が込められた皮肉なコメントだが、エイモスを介してフォークナーがスピレインと比較されている点が面白い。

* 薬学部　第2英語研究室

さて、以下の論考では、フォークナーの短編小説「エミリーへの薔薇 A Rose for Emily」を中心として、フォークナーとミステリーとの関係を考えてみたい。この短編はフォークナーの全作品の中でも特に有名なものであり、良い意味での大衆性を持つが、ミステリー小説的な様々な要素をフォークナー流にアレンジして活用することで小説としての面白さを作り出しているのである。

2. 共同体とよそ者、うわさ

フォークナーの作品には、アメリカ南部社会における共同体と外部からのよそ者との関係を扱ったものがいろいろとある。フォークナーの推理小説的作品を集めた中短編集『駒さばき』においても、共同体によそ者が侵入してくることによって共同体の秩序が乱れて犯罪が生じるという（いささか保守的な）図式が見られる。例えば『駒さばき』中の短編「調合の誤り」においても、犯人は北部人の巡回興業師というよそ者であり、その犯人が南部人の義父を殺したうえで被害者に変装するという「1人2役」のトリックが用いられている。

「エミリーへの薔薇」においても、「北部人　a Yankee」の道路舗装工のホーマー・バロンが南部の町にやって来ることが事件の発端となる（124）。エミリー・グリアソンはよそ者の北部人であるホーマーと恋愛関係に陥り、2人が交際する姿を町の人々は目撃するようになる。「今では私たちは、ホーマーとミス・エミリーが日曜の午後に貸し馬車屋から1組の鹿毛の馬たちに引かせた黄色い車輪の二輪馬車に乗って走り出るのを目撃するようになった」（124）。2人はしばらく交際するのであるが、やがてホーマーは姿を消してしまう。―何かしらの事件が起きたのである。

ここで、事件の中心であるホーマーとエミリーが、「町 town」という南部共同体において、よそ者あるいはよそ者に近い異端児であることに注意したい。

ホーマーは北部人であるから、もちろんよそ者である。一方、エミリーの方は町の旧家の者であり共同体内部の人間ではあるが、町から異端児として見られており、現在の町にとって異質な存在であるという点で、よそ者に近いといえる。生前のエミリーが町にとってどのような存在であったのかは、「エミリーへの薔薇」の語り手による以下の記述に表れている。「生前、ミス・エミリーは一つの伝統であり、義務であり、悩みの種であり、一種の代々引き継がれた町の責務であった」（119）。

上記の引用ではエミリーのことを「一つの伝統 a tradition」と述べているが、没落した旧家の生き残りであるエミリーは、現在の町にとって過去の遺物のような存在なのである。例えば、エミリーが亡くなった時の葬式にやって来た非常に高齢の男たちは、南軍の軍服を着て、あたかも自分たちの同時代人のようにエミリーのことを語る（129）。エミリーという存在は南北戦争当時の南軍という過去に通じているのだ。

また、生前のエミリーがジェファソンの町の人々を困らせた理由の一つとして、エミリーが税金を頑として払おうとしなかったことが挙げられる。昔、1894年に当時の市長だったサートリス大佐が彼女の税金を免除したことがあり（119-20）、その後の新しい世代の人間があらためて税金を徴収しようとしてもエミリーは払おうとせず、「ジェファソンに税金を払う必要はないよ。サートリス大佐がそう説明したんだ」と言い、町の代表者が説得しようとしても、「サートリス大佐に会っておくれ」と主張するのである（121）。この時、サートリス大佐はすでに約10年前に亡くなっており（121）、エミリーにとっての時間は過去の時点で停止していることがわかる。

フォークナーの作品において「時間」の主題は非常に重要であるが、エミリーという存在は、とくに現在と過去のずれを象徴するのだ。エミリーの税金不払い事件は、こうした現在と過去とのずれを端的に表すものである。

さて、北部人のよそ者であるホーマーと、町の中での異端児であるエミリーとの交際は町の人々を動揺させる。よそ者あるいは異端児は共同体にとってミステリアスな存在であり、そのため、「謎」としての強烈な磁力を発するのである。

よそ者あるいは異端児のもつ謎めいた性格は、共同体内に「噂」を生む。ホーマーとエミリーの交際について、町

の人々は様々な噂を立てる。例えば、「もちろんグリアソン家の者は日雇い労働者の北部人のことなんか真面目に相手にしないよ」(124) と言うかと思うと、「彼女は彼と結婚するだろう」(126) と言う。また、ホーマーがあまり結婚に向いていない男であるため「可哀そうなエミリー」(126) と同情するかと思うと、「(2 人の交際は) 町にとっての不名誉だし、若者にとっての悪い見本だ」(126) と婦人たちが怒りだす。さらに、エミリーが砒素の毒を買った時には、「彼女は自殺するつもりだ」(126) と噂するという具合である。

このように、共同体にとっての謎の存在であるよそ者や異端児をめぐって、噂が自己増殖していく。噂は真相と一致しないことが多く、つまり、シニフィアン (意味するもの) とシニフィエ (意味されるもの) とのずれを特徴とする。とくにこの場合、シニフィエに相当する部分がよそ者や異端児という謎めいた存在とその行為であるため、共同体は真相をつかむことができず、よけいに噂が掻き立てられるのである。噂が真相とのずれを伴ったまま、自己増殖するシニフィアンとして次々に広まっていく。「エミリーへの薔薇」では、噂の増殖によって、ミステリー小説にふさわしい謎めいた言語空間が作られていくのである。

フォークナーはこの種の噂を他の作品においても活用している。例えば『アブサロム、アブサロム !』では、町に突然現れて屋敷の建設を始めた謎の「よそ者 stranger」(Absalom 23) であるトマス・サトペンに対して、町の人間は彼の過去の犯罪行為などを推測して様々な噂を立てる (Absalom 26, 34)。『アブサロム、アブサロム !』は、サトペンの家族に関する謎をめぐって登場人物たちが推理をしつつ南部の歴史の深層を探っていく推理小説的な性格を持つ作品だが、やはり噂の増殖が謎めいた言語空間を作り出している。

3. 家の外と内、手がかりとしての臭い

さて、「エミリーへの薔薇」をミステリー小説として考えた場合に、その謎は「家」の内部という空間によって表わされる。エミリーはもともと町の人々とあまり交流をせず、そのため町の中で異端児と見られていたのであるが、ホーマーが姿を消してからはとくに「正面のドアを閉じてしまい」(127) めったに開けることがなくなった。とりわけエミリーが教えていた陶磁器の絵付の生徒が来なくなってからは、ドアは永久に閉じられてしまったのである (128)。町の代表者たちがエミリーに税金を払うように説得しに行ったのが、8 ～ 10 年ぶりに訪問者がエミリーの家に入った例だが (120)、その時の家の内部の様子は以下のように描かれている。「使用されていない埃っぽい臭いがした—閉じた、湿っぽい臭いだ」(120)。この時は、結局、町の代表者たちは、頑固に税金を払おうとしないエミリーに追い払われてしまう。こうして、正面のドアは町の人々に閉ざされたままになり、エミリーは「埃と影に満ちた家の中で」(128) 年老い、病に倒れて亡くなるのである。

このように、エミリーの家の内部は町の人々にとって閉ざされた空間であるために、「謎」としての磁力を発し、家の内部を見たいという強い好奇心をそそることになる。

エミリーが亡くなった時の町の反応は、この作品の冒頭に以下のように描かれている。「ミス・エミリー・グリアソンが亡くなった時、町の人びとはこぞって葬式に行った。男たちは死んだ記念碑的人物に対する一種の親愛なる尊敬の念から、また、女たちはたいてい家の内部を見てみたいという好奇心から参列した。なにしろ、年老いた下男—庭師兼料理人—を除いては少なくとも十年間、家の内部を見た者はいなかったのである」(119)。このように、町の女性たちは、家の内部を見たいという強い好奇心に動かされて葬式にやって来る。とくに階段の上には 40 年間誰も内部を見たことのない閉ざされた「一室」があり (129)、その部屋が謎の中心として好奇心をそそるのである。家の内側に隠された謎—これがミステリー小説としての「エミリーへの薔薇」の特徴である。

なお、こうしたエミリーの「家」の外側と内側という空間的区分は、現在と過去という時間的区分と対応している。エミリーが現在の町において異端児であったのは、彼女が南北戦争当時の過去からの生き残りのような存在だったからである。エミリーの家の閉ざされたドアは、家の外側と内側の区分であると共に、現在と過去とのずれ、断絶を表

してもいる。ドアの奥の「埃と影に満ちた」(128) 家の内側では、過去の世界がしぶとく残留している。そこはいわば過去の亡霊の巣である。

そうした家の内側は謎めいた場所としての磁力を持っているが、そこから謎の手がかりとして発せられるのが「臭い」である。

税金不払い事件の30年前—エミリーの父親の死から2年後、また、ホーマーの失踪から少し後の出来事であった。エミリーの家から、奇妙な「臭い smell」がしてきて (122)、近隣の者たちが市長に苦情を言う。そこで4人の男たちが夜中にエミリーの家の芝生に侵入して、家屋の周りに臭いを消すための石灰を撒く (122-23)。その後1～2週間で臭いは消える。

実はこの臭いは家の中で殺された死体から漂ってきた臭いなのであるが、町の人々はそのことを知らない。この時点では殺人事件という真相は隠されたままで、臭いはシニフィエ (＝殺人事件) に到達できないシニフィアンとして、謎めいた伏線として機能する。

臭いという要素はフォークナーにとって重要であり、他の作品においても用いられている。例えば、『墓地への侵入者』において、主人公のチック・マリソン少年は黒人であるルーカス・ビーチャムの小屋に行ったとき、その黒人小屋の臭いを強く感じ取る。「彼はその臭いをずっと嗅ぎ続けてきたし、これからも常に嗅ぎ続けることだろう。それは彼の逃れ難い過去の一部であった、それは南部人としての彼の遺産の豊かな一部であった」(*Intruder* 12)。チックにとって、黒人小屋の臭いは、そこで幼い時に同時代の黒人少年と一緒になって遊んだり食事をしたりした体験の記憶と絡まっている(*Intruder* 12)。臭いは過去と結びついており、記憶を喚起する作用がある。エミリーの家から漂ってくる臭いも、エミリーの家の内部という「過去」の支配する世界から、家の外部の現在の世界へと漏れ出てきたものである。

さて、臭いと共に、謎の手がかりとして町の人々あるいは読者に与えられるのが、ホーマーの失踪の頃に、エミリーが薬屋でネズミ退治用の毒と称して砒素を買い求めた一件である (125)。(しかも、その時にエミリーが薬屋に言った第1声は、「何か毒が欲しいわ」(125) というものであった。)

また、エミリーの髪の毛が年老いて「銀灰色 iron-gray」(127) になっていったのも、最後の場面の伏線として機能する。

このようにして、エミリーおよび彼女の家の内部は謎としての強力な磁力を発し続け、また、いくつかの手掛かりや伏線によってミステリー小説的な雰囲気を高めながら、最後の第5章の場面へと読者を導くのである。

4. 死体のミステリー

さて、ミステリー小説では、表面上の見かけの裏に深層としての謎の真相が隠されており、そのため、表と裏の2層的構造を持っている。「エミリーへの薔薇」においては、表と裏の2層的構造はエミリーの家の外側と内側という空間的構造に対応している。エミリーの家の内側、とりわけ長い間誰も内部を見た者のいない「一室」に、深層としての謎の真相が秘められているのだ。

最後の第5章において、エミリーの葬式にやって来た町の人々は、エミリーの遺体を埋葬した後にいよいよその部屋のドアをこじ開けて侵入する。「荒々しくドアを破ると、部屋は一面に埃がたちこめたようになった」(129)。ミステリー小説は、表面上の見かけから裏に隠された謎の真相へと物語が進行していく構造を持つのだが、とくにこの「ドアを破って」内部へと侵入するという暴力的な行為は、2層的構造の表から裏へと強引に侵入することを意味している[注2]。そして、ドアを破って部屋に侵入した町の人々が見出したのは、「婚礼用のように飾られ、家具を備え付けた部屋」(129) の様子であり、また、ベッドに横たわった男の死体—行方不明となっていたホーマーのなれの果てなのであった (130)。

さて、この場面についての検討を行う前に、ここで我が国の江戸川乱歩による「エミリーへの薔薇」についての説明を紹介しておこう。乱歩は第2次世界大戦後、海外推理小説や怪奇幻想小説の研究に力を注ぎ、『幻影城』『続・幻影城』などの評論集を刊行した。『幻影城』に収められた「怪談入門」という批評には、「疾病、死、死体の怪談」の項目の一例として、フォークナーの「エミリーへの薔薇」が挙げられているのである（339-40）。

ここでの乱歩は「エミリーへの薔薇」を死体怪談に分類して粗筋を述べているだけで、それ以上の分析をしたりコメントを加えてはいない。しかし、この「疾病、死、死体の怪談」の他の作品例を見てみると、歩き回るミイラのこととか、死体による復讐譚、「走屍」（死体が起き上がって生きた人を追いかけること）の話とかの例が、東西の怪談から挙げられている。つまり、死者が半分生き返って生者のようにふるまう話、死者と生者の本質的な近さを物語る話である。

こうした死者と生者の本質的な近さ、という観点から「エミリーへの薔薇」を改めて検討してみたい。

まず、この作品に描かれたエミリーは、生前から死者と近い世界で生きてきた存在である。エミリーは現代から取り残された、あるいは現代に対して頑固に逆らう過去の遺物である。彼女は町の人々とほとんど交流を持たずに、ドアを閉ざした家の中に住んでいる。その家は埃と影に満ち、いわば過去の亡霊の巣である。いや、エミリー自身が過去の亡霊であると言えよう。この作品はエミリーの死の報告で始まり、過去を振り返って彼女の生涯を物語ったうえで、再びエミリーの死（葬式）の場面で終わる。エミリーは死ぬことによって本来の自分に返ったのである。

エミリーにおける生者と死者の本質的な近さは、特に彼女の葬式の後、町の人々が彼女の家の秘密の部屋にドアを破って押し入った時にはっきりと表れる。その部屋は婚礼用のように飾り立てられており、行方不明となっていたホーマーの死体がベッドに横たわっていた。しかも、その死体はかつては「抱擁 embrace」の姿勢を取って横たわっていたようであり（130）、さらにその隣の枕には「頭の重みによるくぼみ the indentation of a head」があり、そこには「銀灰色の長い一筋の髪の毛 a long strand of iron-gray hair」が残されていたのだ（130）。つまり、エミリーはホーマーを砒素で毒殺した上で、その死体と結婚し、抱擁していたのである。いわば、死者との結婚、死者との抱擁である。生者と死者との本質的な近さを、生と死の境界を超えた愛情という衝撃的な形で読者に突きつけたのだ。

さて、それでは「エミリーへの薔薇」は単に死体についての不気味な怪談にすぎないのであろうか。

そうではあるまい。エミリーはホーマーの死という形で彼との愛情を永遠のものとしたのである。（殺人という行為はもちろん常識的には許されないものではあるけれども。）生者は変化するが、死者は変化せず、永遠のものである。生きているホーマーの愛情は心変わりしてしまう可能性が大いにあるが、死んだホーマーとの愛情ならば永遠不変のものなのだ。

こうした考え方には、この作品の根底にある時間に対する見解が反映されている。すなわち、現在は移ろい、変化するものであるが、過去は変化せず、永遠のものなのである。かつてジャン＝ポール・サルトルは、フォークナーの作品に表れている時間の観念を過去に支配された時間であるとした。それはその通りなのであるが、「エミリーへの薔薇」における過去への執着は、永遠不変の愛情を求める気持ちと通じるものであり、あながち否定的に見ることはできないだろう。

エミリー自身、過去の世界にとらわれてその犠牲となった側面もあるが、むしろ、過去の世界に頑固に生きる姿の中に、彼女の誇りや気位の高さを感じ取ることができる。ホーマーとの恋愛においても、エミリーとよそ者のホーマーとの交際について町の人々があれこれ噂をしようとも彼女自身は気に留めず、昂然と頭をもたげ続けたのである。「彼女は頭を充分に高くもたげ続けた—私たちが彼女は堕落したと信じている時でさえも」（125）。こうした頑固な誇りに対して、作者フォークナー自身も畏敬の念と愛情を持っていたことだろうと思う。

「エミリーへの薔薇」は、ミステリー小説的な様々な要素を活用しつつ、エミリーの頑固な気位の高さとその永遠の愛情とを描いて見せたのである。

注

1. フォークナーとミステリーとの関連については、日本ウィリアム・フォークナー協会の機関誌『フォークナー』第13号（松柏社、2011年4月発行予定）の特集「フォークナーとミステリー」を参照。
2. なお、フォークナーは家あるいは部屋の内部に強引に侵入するというパターンを『アブサロム、アブサロム！』の終章でも使っている。ローザ・コールドフィールドとともにサトペン家へと向かったクエンティン・コンプソンは、ローザに命じられて、閉ざされていた一室のドアを斧で破り（Absalom 293）、行方不明となっていたヘンリー・サトペンを発見する（Absalom 298）のである。

引用文献

Bleikasten, André. *The Ink of Melancholy: Faulkner's Novels from* The Sound and the Fury *to* Light in August. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 1990.

Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Haven: Yale UP, 1963.

Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* New York: Vintage International, 1990.

---."An Error in Chemistry." *Knight's Gambit*. New York: Vintage, 1978. 109-34.

---. *Intruder in the Dust*. New York: Vintage International, 1991.

---. "A Rose for Emily." *Collected Stories*. New York: Vintage International, 1995. 119-30.

Fiedler Leslie. "Pop Goes the Faulkner: In Quest of *Sanctuary*." *Faulkner and Popular Culture: Faulkner and Yoknapatawpha 1988*. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1990. 75-92.

Symons, Julian. *Bloody Murder: From the Detective Story to the Crime Novel: A History*. London: Faber, 1972.

Watson, Jay. *Forensic Fictions: The Lawyer Figure in Faulkner*. Athens, Georgia: U of Georgia P, 1993.

江戸川乱歩『幻影城』、講談社、1987年。

マクロイ、ヘレン『幽霊の2/3』駒月雅子訳、東京創元社、2010年。